

ものづくりの  
原点にふれる

機械化による大量生産以前のものづくりは、手間をかけるのが当たり前でした。手を使って、創意工夫して、一つの物をつくり上げる。時代は変わっても、ものづくりの原点は同じです。

ものづくりを極めると言えば、「職人の技」。専門知識と鍛錬に裏打ちされた無駄のない動き、美しい仕上げ。職人の技にふれるWSも人気。ライブミュージアムのものづくり工房にもタイルづくりの専門家がいて、企画展やWSを支えています。

「しる」は楽しい！

どろ田のための  
「シャワー設備と更衣室づくり」  
WS  
(2013)

「どろの遊園地用の更衣室&シャワー設備がほしい!」「せっかくだから専門家に教えてもらいながら、みんなでつくろうよ」と、大工、木工職人、タイル職人の参加を得て建築WSが決定。回を重ねるごとに参加者が増え、12日間で延べ148人が参加しました。



1,2,3,4 墨付け、刻み、木組み、組立て、棟上げ...  
5,6 シャワーモザイクタイル張り。タイルの美しさは目地を揃えること。「プロの技ってすごい!」

漆喰塗りの  
卓上かまどをつくろう  
(2012)



企画展 日本の白い壁—石灰がつくり出す多様な世界

漆喰塗り体験&  
石灰料理試食会  
(2013)



企画展 日本の白い壁—石灰がつくり出す多様な世界

「アーツ&クラフツの  
ものづくりを体験しよう」  
ルビー・ラスターのタイル制作  
(2011)

ルビー・ラスターのタイル制作。企画展のためにド・モーガンのタイル復元に取り組んだものづくり工房のスタッフが指導。



企画展 19世紀の幸せなものづくり  
〜ウィリアム・ド・モーガンの残したメッセージ

企画展を体験する

土は水を得て形となり、火を通してやきものになります。ライブミュージアムでは、「土・水・火」をテーマに、体験・体感を大切に企画展を開催。そのテーマをもっと身近に感じてほしいと、企画展に合わせたWSを行っています。

大きな生け花のような  
トンネルをつくろう  
(2016)



企画展 素麗のトンネル マブ・ニ五六一人間サイズの土の空間



こもれびを食べる  
動物になろう  
(2014)



企画展 手のひらの太陽  
—「時を知る、位置を知る、姿を残す」道具

みんなで住みたい土の家  
(2013)



企画展 集落が育てる設計図 アフリカ・インドネシアの住まい



自分の時計を  
つくろう  
(2014)



企画展 手のひらの太陽  
—「時を知る、位置を知る、姿を残す」道具

現代の蓑(雨具)を  
つくってみよう  
(2015)



企画展 雨と生きる住まい—環境を調整する日本の知恵

ベンガラで「赤絵」を描く  
「赤い鳥」がいるミラーボックス  
(2015)



企画展 大地の赤—ベンガラ異空間



専門性の高いものづくりの技術を体験できるWSも、ライブミュージアムの大きな特徴です。専門家の力を借りて大成功を収めたのが企画展関連のWSで、19世紀イギリスのド・モーガンが作成したルビー・ラスター彩タイルの再現でした。ものづくり工房の専門家が事前に長期間にわたり調査実験を繰り返し、見事にその制作に成功。そうしたノウハウを一般参加者に伝授し、丸1日かけて下絵描きから絵付けまでコツコツと集中して制作しました。そして工房スタッフの手によって最後の焼成をしてもらい、表面の付着物を磨いていくと見事に光り輝くラスターが現れ、大いなる感動となりました。

スタッフも日々切磋琢磨し、こうした要望に応えられるようにしていきたいと思えます。

● 専門家がノウハウを  
伝授するWS

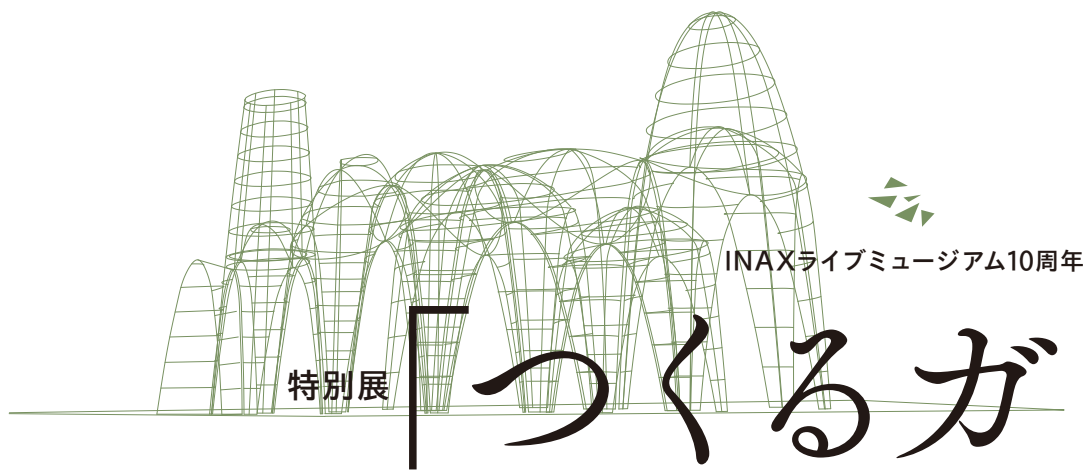
主任学芸員 竹多格



この秋、土・どろんこ館に、スペインの建築家、アントニオ・ガウディの「現代のガウディ建築」が出現します。オープンは11月5日(土)。

しかも、オープン初日にはまだ未完成で、会期末の3月まで、約4か月をかけてその制作風景を見せるという前代未聞(?)の展覧会です。

いったい何が始まるのでしょうか。



ものづくりを発信するライブミュージアムが、ガウディに挑む。



INAXライブミュージアム館長 住宮 和夫

ものづくりの楽しさを伝えようとスタートしたライブミュージアムが10周年を迎えます。この10年、私たちが、どれだけいきいきとした体験・体感の場をつくってきたか、その成長、進化が問われています。

この記念すべき10周年に開催する企画展のテーマは、「ガウディ」。建築設計者・日置拓人さん、左官職人・久住有生さん、タイル職人・白石普さんと、ものづくりを発信するライブミュージアムに共感する方々の協力を得て、ガウディを夢想し、ガウディと対話し、そのものづくりに迫ろうという特別展です。

ライブミュージアムが10年間積み重ねてきたのは、とても泥臭いことです。ものをつくる、知恵を出し合い工夫する、人のつながりを大切にする。そうやって数々の企画展やワークショップを開催してきました。今回は、より磨きをかけて、ガウディを「つくる」。答えのない、まさに“ライブ”なチャレンジです。

企画展にあたり、資料の中から建築家、磯崎新氏のこんな言葉に出会いました。「伝統的な技術に則りつつも、それをぎりぎりまで追い詰めることで表現の限界を突破しようとした。それがガウディ」。今は、この言葉を噛みしめつつ、3人のつくり手が土・どろんこ館を舞台に、彼らの技を突き詰め、どんな表現を見せてくれるか、それを我々がどう伝えていくか。この特別展に、私たちの10年の意気込みを見せていきたいと考えています。

## 特別展「つくるガウディ」 総合ディレクター 水野慶子に聞きました。

### なぜ、 ガウディ？



ガウディの建築は、観るものを惹きつける装飾や建築の形態が印象的ですが、本展では、ガウディ建築に使われているスペインの伝統的な材料、石、煉瓦、土、タイルと、ミュージアムのコンセプトである、「土とやきもの」の素材の共通項に注目しました。

もう一つ、ガウディは現場主義だったと言われ、図面通りに建物をつくるのではなく、スケッチや模型をもとに、現場で職人たちが話し合いながらつくりあげingることを大切にしていました。ガウディは職人をもっとも尊重していました。私たち、ものづくりの企業としても、ミュージアムとしても、ガウディの制作に対する考え方には、非常に共感します。今回の特別展の第1会場では、日置さん、久住さん、白石さんとともに、ガウディと向き合って、現代における私たちのガウディをつくり、その制作過程をご覧いただけます。

### 題材は、 「コロンニア・グエル教会」

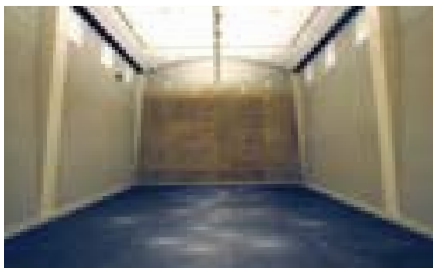
具体的には、土・どろんこ館のなかに、私たちの「コロンニア・グエル教会」をつくりたい。ガウディは、この教会の依頼を受けてから10年をかけて逆さ吊り実験を続け、ガウディ建築を特徴づける建築構造を導き出しました。ところが諸々の理由でコロンニア・グエルは地下聖堂だけとなり、建物上部はつくられなかった。それが実現したものはサグラダ・ファミリアとも言われています。そういう未完の建物を私たちの手でつくりたいというのが、出発点でした。

スペインでは、本展総合アドバイザーの田中裕也氏の案内で数々のガウディ建築に触れ、日本ではガウディが残したコロンニア・グエル教会のスケッチ、吊り下げ実験の資料、研究者の論文などを丹念に調べ、ガウディが何を考えていたのかを追い追いました。ガウディに迫り、そこから私たちの新たな表現をしていくことがねらいです。

また、第2会場では、約40年にわたってガウディ建築を実測し、手描きによる図面制作を行ってきた田中氏の実測図面を展示します。手描きによる図面の魅力と、田中氏のガウディ建築に対する情熱も感じ取っていただきたいと思います。

### ただ今進行中の企画展

この展覧会は進行形です。初日から閉幕



迫力の版築壁「土・どろんこ館」内部。ここに「現代のガウディ建築」が出現する。

の3月まで、会期を通して、進行するものづくりのすべてを見ていただく機会にしたい。ものづくりの場面はさまざま、現場では常にいろいろなことが起こります。土・どろんこ館のなかで、左官やタイル職人がせめぎ合い、ガウディに触発された新たな表現が出てくる。土壁はどう仕上がりが、タイルはどんなふうにならなうに張られていくのか。自分自身も、その現場を目撃できると思うとわくわくします。「ものづくり」の現場と一流のものづくりの達人たちの姿が、直に見られる貴重な機会でもあります。みなさんにも何度でも足を運んでいただきたいですね。



スペイン バルセロナのコロンニア・グエル教会。未完となった上部を、今回の企画展で表現する。

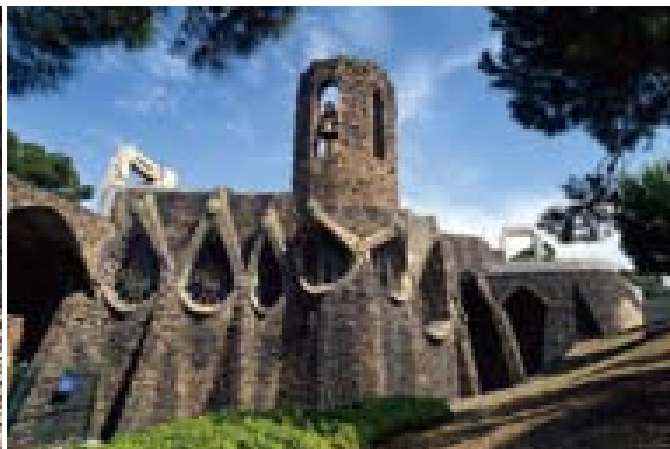


photo by Toru Morimoto





ものをつくって  
生きるのは、楽しい。

## 白石 普

タイル職人  
しらいしあまね  
芸術一家に生まれ育ち幼少より美術、  
芸術に親しむ。イタリア留学やモロッコ  
での修行の経験を生かし、施工はもち  
ろみデザインからタイル制作まで行う  
異能のタイル職人として全国を舞台に  
活躍中。



タイル職人になりたかった  
わけではないんです。もともと  
タイルを作りたいって思ってたんです。  
陶芸家でありながら霞  
が関ビルや札幌市庁舎など

日本を代表する建築のタイルをデザインし制作していた父  
に影響を受けつつ、僕は施工も自分でしたいと思いました。  
徹底的に自分の力ではじめから最後までつくるといことに  
こだわった結果がタイル職人の道に入るきっかけでした。

色彩豊かに装飾でき、永久的に美しいタイルに魅せられて  
います。昨今はそうでないタイルが蔓延していますが…  
モロッコには2年いて、学校や工房で、伝統のタイルモザ  
イク「ゼッリージュ」を学び、モスクの施工もしました。タ  
イルは幾何学です、すごいですよ幾何学は。三角定規とコン  
パスさえあれば無限に広がっていく、まるで宇宙です。

ぼくは、タイルをつくることから始めます。デザインして、  
作って、焼いて、施工して最終的に空間が収まるというのが  
ぼくのものづくりの醍醐味。やはり張り終わった瞬間が一番  
好き。30分くらいぼーっと見ている。お客さんに渡す前、その  
時だけ自分のものって感じてね。

つくって自分を表現することなんだけど、どこまで行って  
も答えに届かない。ガウディ展でも、ぼくがデザインしたタ  
イルを焼いて、現場でのインスピレーションを大事に施工した  
い。日本一の左官職人とほとんどアドリブでつくってね、  
せっかくならっかいいものをつくりたい。そういうぼくらの  
姿を見て、ものをつくって生きるって楽しそうだと感じてもら  
えたらいいですね。

## 久住 有生

左官職人  
くすみなおき  
祖父の代から続く左官の家に生まれ、  
3歳で鏡を握る。高3の夏スペインで  
ガウディを見て「左官もいいな」と本格  
修業の道へ。伝統建築から現代建築  
まで多様な壁を仕上げる。



小さい頃から父親の現場  
に連れて行かれ、道具の手  
入れ、砂ふるいに始まって、  
壁塗りの練習、押し入れな  
んかの狭い空間の壁塗り…

もうやるのが当然で、2回くらい家出しましたよ(笑)。だか  
ら目をつぶっていても壁は塗れる。でも美しい壁って技術だ  
けでできるものじゃないんです。自分の中に「これは絶対き  
れい」という美意識がないと。そういう意味では、子ども  
の頃から無意識のうちにきれいなものをたくさん見せてもら  
っていたし、手で覚える以外の、精神的なことを躰けられた  
ような気がする。技術、技術って言うけど、いい仕事をする  
ためには、仕事場を整えたり、周囲の人を尊重したり、  
気づかひも必要。それって思いやるってことですよ。ね。  
それができる職人しか、いい職人にはなれない。絶対に。  
ものづくりって「思い」を込めることが大切だと思う。その  
思いが手間と暇をかけさせる。思いが込められたものは粗  
末にしない。人から人へ大事に受け継がれる。そういうの  
がぼくらのものづくり。

まあ、いろいろ言いましたが、けっきょく好きで楽しくつく  
っているっていうのが、ほんまのところ。ガウディ展では、  
ぼくらの仕事の進行中を見せます。ライブミュージアムらし  
いし、ぼくらの理想でもある。人がものをつくっているとこ  
ろを見るというのは、大事ですよ。



思いを込めて  
“つくる”

職人とともに  
設計者でありたい。

## それぞれの“つくる”を語る

今回の、特別展「つくるガウディ」で  
制作を担当する、  
日置さん、久住さん、白石さん。  
“つくる”ことを仕事に、  
日々格闘されるみなさんに、  
それぞれの“つくる”と  
ガウディ展への想いを聞いてみました！

## 日置 拓人

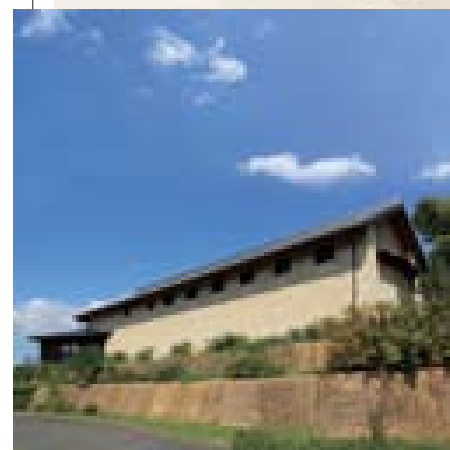
建築家  
ひきたくと  
早稲田大学大学院時代、淡路島の左官  
職人・久住章さんに出会い、土の魅力と  
職人技に魅了される。以来、土にこだわ  
り、職人とかわり続けることを「つく  
る」ことの基本に据える。



ぼくは、設計者と職人が  
一緒につくる場面ができる  
だけつくりたい。そこから生  
まれる細やかさやデザイン  
が、空間にぬくもりや居心

地の良さを与えているから。土・どろんこ館も、久  
住有生くんに土の表現をしてもらいたいと、設計段階から一  
緒につくりました。使う土も常滑で、と探しに行った。自分  
の身体を移動させて、その場所を感じて、つかんだ情報を  
建築に反映させるのは、“つくる”上でとても大切。贅沢な  
ことです。世の中の的には手間がかかって嫌がられるかもし  
れないが、ぼくは、そういう作り方を学びたい。土・どろん  
こ館は理想的な形でできました。職人は自分の仕事の範疇  
を知り、そこで自分のベストを出す。彼らが力を発揮できる  
よう環境を整えることがぼくのスタンス。地味ですが、それ  
でできあがったものが、いいねと思ってもらえれば本望です。

調べていくとガウディも、自分のめざすデザインを職人と  
一緒に、現場で、一つのチームのようになってつくり上げて  
いたことがわかって、すごく共感した。巨匠と言われる存在  
なのに人間味がある。コロニア・グエルをどう完成させよう  
としていたのか、何を考えていたのか、企画展では、ガウ  
ディの想いをしっかり受け止めて、共振するようなものをつ  
くりたいですね。



土・どろんこ館

全体会議  
現代の職人が新しい解  
釈で迫る“ガウディ建築”  
に知恵を出し合う。

特別展「つくるガウディ」